

キング・アーサー (KING ARTHUR)

2004(平成16)年7月13日鑑賞(試写会・厚生年金会館芸術ホール)

★★★



監督＝アントワン・フークア／出演＝クライヴ・オーウェン／キアラ・ナイトレイ／ヨアン・グリフィズ／スティーヴン・ディレイン／ステラン・スカルスゲールド／レイ・ウィンストン／ティル・シュヴァイガー／ヒュー・ダンシー／ジョエル・エドガートン／マッツ・ミケルセン／ジレイ・スティーヴンソン (ブエナ・ビスタ・インターナショナル (ジャパン)) 配給／2004年アメリカ映画／126分)

……舞台を5世紀のブリテン(イギリス)に設定し、ローマ帝国に所属するアーサーとそれに従う円卓の騎士たち VS. サクソンとの対決を軸に描くアーサー王伝説! 確かにスケールの大きな戦闘場面はすごいし、美女の活躍も楽しいものだが、最近のハリウッドのファンタジー物語にはちょっと飽きてきた……?

アーサー王伝説とは?

アーサー王伝説をいろいろと解説していくと、それだけで大論文になってしまうが、実はこれは「伝説」とされているように、はっきりとした歴史上の事実として存在しているお話ではない。

しかしヨーロッパでは、このアーサー王伝説は大人から子供まで多くの人たちにお馴染みの物語。日本人でも知っているアーサー王伝説にまつわるキーワードは、①中世の物語、②円卓の騎士、③エクスカリバーの剣、④中世の理想郷キャメロット、程度だろう。

もう少し勉強した人であれば、⑤リヒャルト・ワーグナーの歌劇『トリスタンとイゾルデ』は、円卓の騎士の1人イゾルデを題材にしたものであること、⑥円卓の騎士たちがキャメロットを離れて、聖杯を探す旅に出る物語が『インディ・ジョーンズ』に生かされていることを知っているかも知っているかも……。

このアーサー王は5世紀が舞台

ところが、この『キング・アーサー』のアーサー王は、5世紀のブリテン（イギリス）が舞台。しかもアーサーと6人の騎士たちはローマ帝国に所属する騎士だということから、私の歴史上の知識では「えー、何で！」とってしまう。もっともローマ帝国に所属するといっても、それはローマ帝国によって征服された国の若者たちが、15年間の「兵役の義務」を果たさなければ自由を得られないため、やむをえずローマ帝国に忠誠を誓い、その騎士として今日まで数々の戦いで活躍してきたということだ。したがって、アーサーとその部下である6人の騎士たちの願いは自由。そして、今日は、今まで15年間の戦いの日々が終わり、念願の自由を獲得することができる日のはずだったが……？

この映画が設定する時代背景

この映画のパンフレットには、次のように実にうまくこの映画が設定する時代背景を要約している。すなわち、

「西暦415年ーローマ帝国の支配下にあったブリテンでは、帝国からの独立を求める反乱軍＝《ウォード》とローマ帝国軍が終わりなき戦闘をくり広げていた。その一方で、残虐なサクソン人が虎視眈々とブリテンの侵略を狙っており、ローマ帝国、ウォード、サクソンの3つの勢力争いは混迷を極めていた……」

こういう状況の下で、力にかけりを見せ始めたローマ帝国は、ブリテンからの撤退を決断した。つまり、それまで「北方の脅威」を防ぐために120kmにわたって築造したハドリアヌスの城壁を放棄してしまうわけだ。すると、これまでローマ帝国の支配下にあったブリテンは、その後強暴で冷酷なサクソンに侵略されることになるが、それはローマ帝国にとっても騎士たちにとってももはや無関係なこと。しかしウォードにとってそれは死活問題であり、新たに生き延びるための途を模索しなければならないことになった。

騎士たちへの新たな命令とは？

兵役の義務が終了し、自由になった後のそれぞれの夢を語り合う騎士たちだっ

たが、1人円卓に残されたアーサーに伝えられたのは、ローマ教皇からの最後の命令。それはハドリアヌスの城壁の北の土地に居住しているローマ人貴族マリウスの一家を救出せよという命令だった。既にサクソンの南に向けての侵攻が開始されている今、それはあまりにも危険な任務。しかしローマ帝国は、ローマ教皇の名の下、騎士たちに「この命令に従わない時は、自由を与えない」と宣言した。この命令に従って、ハドリアヌスの城壁を出て、北方へ向かう騎士たちを待ちうける運命は……？

3つの勢力争いの崩壊から生まれる新たなトレンドは？

前述のとおり、ローマ帝国のブリテン撤退により、それまでの、あたかも魏・呉・蜀の三国が鼎立した中国の三国（志）時代のような、ローマ帝国、ウォード、サクソンという3つの勢力の均衡は崩れ、このままではブリテンは一方的にサクソンの一人天下になる可能性が高くなっていった。そんな中で策をめぐらせたのは、ウォードの指導者である闇の魔術師マーリン（ステイーヴン・ディレイン）。その策とは、ウォードはそれまでローマ帝国の敵だったが、侵攻してくるサクソンのことを考えれば、今撤退しようとしているローマ帝国と争うことは無意味。したがって、今マリウスの救出のためハドリアヌスの城壁をこえて北に向かっているアーサーたちを討ち取るのは簡単だが、それはまずい。さらにアーサーは、実はローマ人の父とブリテン人の母から生まれた男だから、アーサーこそが新生ブリテンの王としてふさわしい。

このようにマーリンは読んだわけだ。そのためマーリンはアーサーに対してその働きかけを……。

美女グウィネヴィアとの遭遇は？

マリウスの住む村にたどり着いたアーサーたちは、そこで奇妙なものに出くわした。マリウスは忠実なローマ教皇の信者であったため、それに従わない村人やウォードたちを異端派として牢に閉じ込め、拷問にかけていた。また、マリウスはこの村の独裁者となっており、マリウスに従わない村人たちは奴隷のような仕打ちをうけていた。そんなマリウスだが、とにかくこれを救出して、ハドリア

ヌスの城壁まで連れ戻さなければならないのがアーサーたちの任務。しかしそこで思わぬ副産物(?)が……。

それは牢の中に閉じ込められていた1人の子供と拷問をうけて左手にひどい傷を負った女性グウィネヴィア(キーラ・ナイトレイ)を救い出したこと。サクソンの攻撃が迫ってくる中、アーサーはマリウスだけではなく、無謀にもグウィネヴィアや村人たちすべてを連れて、ハドリアヌスの城壁に向けての脱出の旅に。しかしこの集団の前には氷河が、そして後方にはサクソン軍の指揮官セルディック(ステラン・スカルスゲールド)の息子シンリック(ティル・シュヴァイガー)が指揮するサクソンの部隊が迫っていた……。

ハリウッドのファンタジー大作にはちょっと飽きてきた？

最近のハリウッド映画の大作は、『ロード・オブ・ザ・リング』3部作(01年、02年、03年)や『キング・アーサー』のプロデューサーであるジェリー・ブラッカイマーの前作『パイレーツ・オブ・カリビアン』(03年)、そして『スパイダーマン』(02年、04年)や『ハリー・ポッター』(01年、02年、04年)などファンタジー的な大作が多い。

それはそれで楽しいものだし、CGをふんだんに使った壮大な戦闘シーンも迫力があって面白いものだが、そういうヴァージョンばかりが続くと、いささか飽きてきたというのが私の本音……？

他方、2004年6月19日～7月30日にシネ・ヌーヴォで開催されている「中国映画の全貌2004」における『始皇帝暗殺』(98年)などCGを使わない中国映画の大作や『紅いコーリャン』(87年)、『芙蓉鎮』(87年)、『朱家の悲劇』(94年)など数々の中国映画の名作やさらには近時の『たまゆらの女』(02年)、『シヨンヤンの酒家』(02年)などの新作を観ていると、そちらの方に心惹かれているのが今の私の正直な心境。

3つの戦闘シーンがこの映画のハイライト

この映画のハイライトとなる戦闘シーンは合計3つ。第1は、ローマからやって来た司教を襲うウォードとこれを守る騎士たちとの戦い。第2は、マリウスを

救出し、村人たちとともにハドリアヌスの城壁に向かう途中での、氷上におけるサクソン軍との戦い。そして第3は、「バドンの丘」の戦いとして歴史に記されている騎士+ウォードの連合軍 VS. サクソンとの一大決戦。

グウィネヴィアはウォードの女戦士

アーサーに救出されたグウィネヴィアは美しいだけではなく、弓の名手であり、ウォードの女戦士。その弓矢の実力が遺憾なく発揮されたのは、氷上の戦い。追りくる数百のサクソン軍を迎えうつ騎士たちは合計7名だったが、グウィネヴィアは「8名よ！」と告げてこの戦いに参加。

グウィネヴィアの弓から放たれる矢は次々と的確にサクソンの兵士たちを射抜いていった。そしてその戦いの後、「ここは、あなたが何よりも尊いと思っている自由の大地よ。そして今、人々は指導者を必要としているの」と訴えるグウィネヴィアに対して、アーサーもいつしか自分の王としての使命を自覚していくことに……。

個性的で魅力的な騎士たち

今アーサーに従う円卓の騎士は6名。①アーサーの無二の親友で、最強の騎士のランスロット（ヨアン・グリフィズ）、②気性は荒いが陽気な快樂主義者で、3人の妻をもつボース（レイ・ウィンストン）、③円卓の騎士の中で最も若く、故郷への思いが人一倍強いガラハッド（ヒュー・ダンシー）、④「戦場こそが俺の祖国」と考える、生まれながらの戦士ガウェイン（ジョエル・エドガートン）、⑤偵察のプロで、鷹を自由に操るトリスタン（マッツ・ミケルセン）、⑥無骨な外見とは異なり、弱者への優しさに満ちた好漢ダゴネット（ジレイ・ステイーヴンソン）の6名。

実はアーサー王伝説の「定説」では、このランスロットはアーサー王の王妃となったグウィネヴィアと（不倫の）恋におちて、アーサーと対立することになるのだが、この映画ではそういうややこしい(?)話は全くなし。アーサーに忠実に従い、そして死んでいくだけの役柄に徹している。彼らはそれぞれに個性的で魅力的。中でも3人の妻をもち、10名以上の子供をもつ力持ちのボースの個性は

強烈で、この映画ではランスロット以上の話題を。

すなわちこのボースは、氷上の闘いにおいて、迫ってくるサクソン軍を阻止するため、弓矢で射られることを恐れず、戦闘用のこん棒で氷を割り始めた。必死でこれを援護するアーサーとグウィネヴィアたちだが、その甲斐もなくボースは……？ しかしこの命がけのボースの行動によって、氷が不気味な音をたてながら割れ始めたため、サクソンの追撃軍は総崩れとなり、遂に攻撃をあきらめざるをえなくなった。

圧倒的迫力で描かれるバドンの丘の戦い

アーサーはあくまで自分の理想に忠実な男。したがって、マリウス救出の功績によりやっと自由を得た騎士たちが、ローマ帝国軍とともにハドリアヌスの城壁から撤退していこうとしても、1人アーサーだけは城壁に残り、サクソンと戦う決意をしていた。しかし、それは何のためか？ また誰のためか……？

サクソンの大軍が迫ってくる中、これを1人迎え撃とうとするアーサーを応援するのは、既にこのアーサーをウォードの新たな王とすることを決意したマーリンやグウィネヴィアたちの総力をあげたウォード勢。

そんなアーサーの姿をみて、既に命を失ったボースを除く5名の騎士たちもアーサーの旗の下に結集した。これぞ騎士のロマン、男の友情というものだ。

さあ、最後の決戦の火蓋は切って落とされた。この映画の総力を傾けたクライマックスである「バドンの丘」の戦いの圧倒的迫力を、心ゆくまで楽しもう！

よくわからない宗教問題

パンフレットには、アーサーは「敬虔なクリスチャン」と書かれているが、アーサーの宗教観そのものは、映画からはよくわからない。しかし、アーサーは理想主義者であり、恩師から「人は皆自由に生きる権利があると教えられた」というすごく近代的(?)な「思想」をくり返し述べている。そのため命がけで救出したマリウスからは、「ローマ帝国に帰ったら異端派裁判にかけてやる！」と言われる始末……。

他方、ローマ帝国にはローマ教皇がおり、たくさんの司教がいる。そしてパン

フレットには「ローマ教会の教え」と書いてある。ローマ帝国は、自ら神の子と名乗ったイエス・キリストを結局のところ磔にしてしまった。そしてその後、ローマ帝国の宗教がどのように展開していったのかは、昔歴史で学んだ以上の知識がなく、実はよくわからない。

しかし、「異端派裁判」は中世の「暗黒時代」のものだったと記憶しているので、5世紀のブリテンでこんな会話が本当にあったのかどうかについては疑問。もう少し詳しく解説を加えてもらいたいものだ。いずれにしても、ヨーロッパの宗教問題は複雑でよくわからないというのが正直なところで、詳しい解説が必要不可欠だ。

民族問題もよくわからない

また民族問題にしても、アングロ・サクソン民族 VS. ゲルマン民族との対立は歴史で学んだというイメージがあるが、サクソン VS. ローマ帝国という対立の図式を聞いたのはこの映画がはじめて。またウォードという言葉もはじめて聞いたもの。

こういう民族対立に関する歴史的背景についても、もう少し丁寧に詳しく解説してもらおうと、この映画が描こうとする定説とは異なるアーサー王伝説の理解がより深まるというもののだが……。

単純なハッピーエンドはちょっと……？

バドンの丘の戦いは終わった。そして戦い終わった戦場は死体の山。サクソンの指揮官セルディックの死体も、その息子シンリックの死体もある。しかし他方、騎士の側の犠牲も避けることはできないものだった。ランスロットたちの死体を見て、「死ぬのは俺のはずだった！」と嘆くアーサーだが、それは神の思し召しというもの。そしてこの映画のラストは……？

それは、アーサーとグウィネヴィアが祝福をうけながら結婚式を挙げ、新しいブリテンの誕生を祝うというハッピーエンド。しかし、これはあまりにも単純すぎるというもの……。何かちょっとひとひねりがほしかったと思うのだが……。

2004(平成16)年7月15日記